

平成 27 年度 インクルーシブ教育システム構築モデル事業 成果報告書Ⅰ
【インクルーシブ教育システム構築モデルスクール】

法人名	学校法人 武蔵野東学園
-----	-------------

概 要

モデルスクールの概要（平成 28 年 3 月 24 日現在）

	モデルスクール名	在籍者数	教職員数
1	武蔵野東第一幼稚園	221 名	23 名
2	武蔵野東第二幼稚園	364 名	35 名

【事業概要】

1. モデルスクールの特色（特別支援教育に関する事項）

本園では、自閉症スペクトラム児を幼稚園段階から受け入れ、社会的に自立するまでの一貫した教育を行っている。また、特別支援教育の根幹としての基礎的環境整備は、自閉症スペクトラム児のみの特別支援学級を用意していることである。このクラスでは、それぞれの幼児の障害特性にあわせ、情報のコントロールや視覚支援などを行い、身辺自立に向けた保育を行っており、生活面の自立、気持ちの安定、自己肯定感の育成などを図るための取組を進めている。

また、通常のクラスとの交流を定期的に行い、他者と一緒に取り組む楽しさや他者から認められる喜びを味わいながら成長していく機会も大切にしている。交流の回数や時間の長さなどは一人一人の実態を踏まえて意図的に設定しており、登園から降園までを通常のクラスで過ごすケースもある。

また、保護者と協働しながら子育てをしていくことにも力を入れている。月に 1 回程度のペースで保護者会を開催し、障害の診断を受けて間もない保護者と一緒に、短期的、中長期的な目標を踏まえた上で保護者としての心構えや、障害特性に応じた子育て上のアドバイスなど、保護者が安心して子育てできるよう支援している。また、保護者のサークル活動なども大切にし、園と保護者だけでなく、保護者同士で支えあうことも大切にしている。

本事業の受託を踏まえて、本園で行ってきた自閉症スペクトラム児へのアプローチが、様々なインクルーシブ教育システムの中の 1 つの形として効果を示すことが出来るよう公開保育などを行い、広く地域にも本園の教育を知ってもらえるよう平成 27 年度の研究をスタートした。

2. 取組の概要

- ① SCERTS 調査を継続し、本園での子供たちの成長のエビデンスをとることで、個々への支援が子供の成長とどう結びついているか、どの分野が伸びているのかなどの傾向をさぐり、担任との共有を行い、合理的配慮に活かした。
- ② 本園の特別支援学級の園児から 10 人を対象とし、保育者が保育中の子供の画像を取り、それを用いて月ごとの子供の育ちをまとめた。まとめたものを持ち寄り、月ごとに話し合いを行い、効果的な合理的配慮について共有を行った。この結果を合理的配慮協力員にも報告し、助言をもらいながら研修を進めた。
- ③ 入園当初の様子と、3 学期の様子をビデオに撮り、比較することで基礎的環境整備としての特別支援学級で成長した部分、合理的配慮のもと個々で成長した部分それぞれについて検討を行った。またそのビデオを、年度末に編集した。平成 28 年度以降も本園のインクルーシブ教育の普及を行うため、教育関係者や研究者に頒布する。
- ④ 3 年間の取組を、市の教育委員会、市の子ども家庭部などと共催し、発表する公開保育を 10 月に行った。25 年、26 年の研究成果物を配布し、その取組について話をした。地域の小学校の校長、通常クラスの担任、特別支援学級の担任、また教育委員会、市議会議員などにも来園してもらい、より地域とも連携をはかれるようにした。

3. 成果及び課題

- ① 3 年間 SCERTS 調査や新版 K 式発達検査を対象園児に対して行ったことで、数値で成長を感じたり、伸びやすいところがみえたりと大きな効果があった。この 3 年間はその結果を担任と考察し、保育に生かそうと努力してきた。個人的にはとても大きな手がかりにはなったが、この結果をもう少し大きく合理的配慮に生かすことができたかということ、課題が残った。今後はもう少し細かく分析を行い、SCERTS の伸びている分野は、何がそうさせているかなどの検討を行いたい。
- ② 園の特別支援学級の園児から 10 人を対象とし、画像を用いて月ごとの育ちをまとめた。画像を使うことで、直接関わっていない保育者でも同じように子供の育ちが分かった。また、合理的配慮協力員の先生方と話し合い、個人目標に対する手立てを書くようにしたところ、一人一人に対する合理的配慮が見えやすくなり、また他の子供の合理的配慮でも共有することがしやすくなった。

- ③入園当初の様子と、3 学期の様子をビデオに撮り、比較を行った。またそのビデオを、年度末に編集した。合理的配慮協力員の先生方にも視聴してもらい、付け足し事項や、テロップの確認などを行った。実際に保育の様子をまとめることで、「空気感が伝わってくる」「通常の学級の保育者にもみてもらい、支援の参考にしてほしい」「自閉症児同士の集団が、自閉症児にとって安心する場となっている」などという感想をもらった。平成 28 年度以降も本園のインクルーシブ教育の普及を行うため、教育関係者や研究者に頒布する。
- ④ 3 年間の取組を、市の教育委員会、市の子ども家庭部などと共催し、発表する公開保育を行った。内容に関しては合理的配慮協力員の先生方と相談した。平成 25 年、26 年の研究成果物を配布し、その取組についても話をした。地域の小学校の校長、通常クラスの担任、特別支援学級の担任、また教育委員会、市議会議員などにも来園してもらい、より地域とも連携をはかれるようにした。しかし、通常の授業日だったことと、幼稚園の教育に対して認知度が低いこともあるのか、参加人数は 40 名強ほどであった。教育委員会からは「来年度以降もこのような機会をもうけてほしい」という意見をいただいているので、28 年度以降も継続していく方向で考えている。平成 27 年度成果物は今年度公開保育で来園された先生方だけでなく、今後の公開保育でも配布を行い、インクルーシブ教育システムの一つの形として本園の取組について伝えていきたい。